

# 読書と外国語教育

阿部 征一郎

## はじめに

ここでいう「読書」は、まず「多読」の意味で使っている。多読とせず読書としたのは、さまざまな本を自由を楽しみながら読む行為を外国語学習の積極的な意味としたいからである。読書を強制することには問題があるが、もし読書によって外国語により興味を持つことができ、更に外国語の力も養成できるのであるならば、読書は外国語を学ぶ大きな理由になりえるであろう。どのような方法によって、外国語による読書がなりたつのか、以下に考察を進めてみたい<sup>1)</sup>。この小論は英語を中心にするが、考え方はすべての外国語教育に当てはまるはずである。

## I

読む力をつけることは、いつの時代にも必要なことであり、しかも読む力の養成も他の聞く、話す、書くの3つの技能と同様、相当な訓練を必要とすることは言うまでもない。ある技能を伸ばすことによって、他の技能も間接的に伸びることは期待できるが、直接的な効果を期待することは出来ないだろう。たとえば、どんなに話す力の養成の綿密なプログラムを作ったとしても、これによって読む力を飛躍的につけることは出来ない。読む力の養成にはそのための特別のプログラムが必要だからである。4技能のどれを重視するかは、いろいろの立場があると思う。筆者自身は読む力をつけることが、大学の外国語教育に求められている最重要の事柄だと思っている。

いや筆者が言うまでもなく、多くの授業は教科書リストや授業案内を見れば読む力の養成を目的にしていることが明らかであるように思われる。しかし筆者は、教養課程の英語でよく見られるように、100頁程度の教科書を半年から一年かけて丹念に読むいわゆる精

1) 筆者は「英語多読の試み」(「アルテス・リベラレス」岩手大学人文社会科学部紀要第42号、1988年、pp. 99-105)を基にその後の考察を加え、「読書と英語教育」と題して、第15回全国英語教育学会において発表した(1989年)。この発表を基に、上記紀要との重複をできるだけ避けて、この小論の考察を進めたつもりである。

読方式では、読む力はないかと思っている。実際に読む力がつくのは、その何倍もの量を読みこなさなくてはならないのではないかと、思う。

ここで、恐らくは反論があって、だからこそ多読のためには、語彙と文法を固めているのであり、それが多読の段階よりも先であろうと。確かに、多くの学生は、語彙力も文法理解も十分ではない。しかしそれを解決する方法として、精読方式は、果たして効果的であろうか。この精読方式をどれだけの期間続けたなら、多読への展望が開かれるのであろうか。英語専攻の学生でも、卒業時まで独力で一冊の本すら読んでいない学生が多いと思われる時、読む力の養成に関して改めて考えてみる必要があると思う。

## II

読む力の養成に関しては、語彙力と文法理解とが先ず問題になると思う。辞書を丹念に引くことが、語彙力の強化になることは認めるが、それが語彙力強化により効果的な方法かどうか筆者は大いに疑問を持っている。なぜなら、辞書を丹念に引いて覚えていられるほど、多読に必要な語彙は少なくはないからである。また徹底して辞書を引くことに耐えられる学生は余り多くはない。基本語彙を覚えることもなかなか大変であり、しかも多読に必要な語彙は基本語彙の5、6千語では十分ではない。それゆえ語彙をふやしてから、多読を考えるならば、いつまでたっても多読には踏み込めないであろう。語彙力強化の方法は考えられなければならない。短期間の記憶としてならば、一定数の語を覚えることはそれ程難しいことではないが、数多くの語を長期に記憶し続けることは、非常に難しい。読む行為を通じて、語彙をふやしていくことが、もっとも自然なあり方である。カトー・ロンブの言うように<sup>2)</sup>、「快適な読書を通して」多くの語彙を習得するものなのである。

語彙、文法を含めた形の多読の方式はないかと考えて、思いついた方式は、ある意味では安易すぎる、ある意味では危険な、翻訳を利用しながらの多読という方式である。逆に言えば、これ以外には多くの学生にとっての多読はないのではないかとということである。この点では、多くの学生も同意しているように思われる。翻訳を利用するということが自体は、珍しいことではない。対訳本が数多く市販されている。しかし、どのような用い方が実際に外国語の力を伸ばすのか余り考えられてはいなかったように思う。翻訳を利用することが教育の場では好ましくないこととして避けていたものを、むしろ表に出し積極的な意義付けを行ないたいと思う。筆者は、翻訳を利用することが、外国語の学習期間を大幅に短縮し、しかも学ぶことの充実感を得る、今考えられる最良の方法ではないかと考えて

2) 筆者の外国語教育に対する基本的態度は、カトー・ロンブのこの言葉に帰する。カトー・ロンブ、米原万里訳、「私の外国語学習法」(1981 創樹社)、p. 73。

いるからである。もし、筆者の方式が評価されるものとしたならば、それは翻訳を用いて多読の授業を試みたことと<sup>3)</sup>、翻訳を用いることの意味づけを行ったことと言えるかも知れない。

### III

この方式は、語彙習得を容易にするであろう。辞書を引くにしても、時間を短縮することが出来る。多くの場合、内容が分かっているならば、文脈から単語の意味を類推できる。これを何度も繰り返せば、自然に単語は覚えられるはずである。実際に使われることのない単語を長期に記憶しておくことは難しい。覚えることを義務とせず、自然に覚えられるのを待つ行き方により、基本単語を必死に覚える作業から、学生は解放される。そもそも基本単語かどうかは、この場合意味を持たない。数多く現れる語が自然に語彙力として蓄積されていく。

翻訳を利用すれば、単語一対一の対応をいつも期待できるわけではないが、翻訳により何が書いてあるかが分かれば、元の言葉とどう対応するのかを検討することが出来る。ある文章が、なぜこのような翻訳になるのか、この種の検討が、実は語学力をつける非常に効果的なあり方ではないだろうか。

ある原文が分からず、更に翻訳を参照しても分からなければ、このことは逆に語学学習

3) 授業をいかにしているかは、「英語多読の試み」を参照のこと。翻訳を利用する方式の授業で、これまで扱ってきたテキストは以下のとおりである。(「英語多読の試み」の記載分も含む。)

1986年10月～1987年3月		
A	Margaret Drabble: <i>The Millstone</i>	(Penguin) 172
1987年4月～1988年3月		
B	F. Scott Fitzgerald: <i>The Great Gatsby</i>	(Penguin) 166
//	Jonathan Swift: <i>The Gulliver's Travels</i>	(Penguin) 310
//	Charlotte Brontë: <i>Jane Eyre</i>	(Penguin) 439
C	George Eliot: <i>Silas Marner</i>	(Penguin) 194
//	Daniel Defoe: <i>The Journal of the Plague Year</i>	(Penguin) 234
//	W. Somerset Maugham: <i>Of Human Bondage</i>	(Penguin) 598
1998年4月～1989年3月		
D	Graham Greene: <i>The End of the Affair</i>	(Penguin) 186
//	Raymond Chandler: <i>The Long Good-bye</i>	(Penguin) 315
E	Jeffrey Archer: <i>Kane &amp; Abel</i>	(Fawcett) 470
//	Emily Brontë: <i>Wuthering Heights</i>	(Oxford) 338
F	Margaret Mitchell: <i>Gone with the Wind</i>	(Pan) 1007
1989年4月～7月		
G	L. M. Montgomery: <i>Anne of Green Gables</i>	(Penguin) 247
H	Louisa M. Alcott: <i>Littl Women</i>	(Penguin) 292
I	John Steinbeck: <i>The Grapes of Wrath</i>	(Penguin) 502

Aは岩手大学教育学部、Dは同農学部、その他は同人文社会科学部の一年生または二年生、いずれも教養課程の英語クラス。右端の数字は実質頁数。

において重要な意味を持っていると考えられる。つまり何かの原因で、つまづいているのだから、それを突き止めれば、分かるための方策を探し出すきっかけとなる。この時に、文法の知識が必要であれば、文法に当たればいい。このような文法の学び方のほうが、遙かに文法理解が容易になると思う。文法の細かい規則を、実際に会うことがないところで学ぶことは多くの学生にとって、余り意味があるとは思われない。

教室では、学生が検討した結果分らなかったものを説明することを授業の中心とする。単語の意味などの辞書のレベル、構文などの文法のレベル、背景や文学的表現などのレベルを考えながら、問題点を捜し出していく。単語のレベルでは、どのような辞書を参照すべきか、単語の覚え方などについても触れる。文学的表現というのは、比喩やアイロニー、その他のレトリックの問題をも含む。背景や文学的表現などの問題は、学生の分からない要素となっていることが結構多いからである。

翻訳を利用する方法とはいえ、学生がともかくも外国語で書かれている本を読むことができたというのは、大いに意味があるように筆者には思える。なぜなら、多くの学生にとって、図書館や書店に並ぶ洋書は、無縁に近いものだったわけで、方法によっては近ずき得ることが分かったのであるから。

翻訳を利用することの長所短所を考えてみたいと思う。短所としては、翻訳に頼りすぎで、原文を読むことがおろそかになることがまずあげられる。しかし、原文をまず読むことから始めることによって、この弊害はかなり防ぐことができると思う。また、訳者の文体や日本語の感覚が、支配的になることが考えられる。しかし、始めのうちはこれは避けられない。原文に慣れてくれば、徐々に英語の文体にも慣れ、原文の持つ微妙なニュアンスを感じとれるはずだからである。

翻訳を利用する時、心配な点は、いつまでたっても翻訳から離れられないのではないかということであろう。実力がついてくれば、翻訳に頼る割合が減って、最終的には、翻訳も辞書も余り必要なく読んでいけるはずだと考えているのであるが。そして、量をこなせば、日本語を介在することなく、原文を読むことが可能になると思う。

英文を文法書と辞書以外に頼りにするものなく読み進めるのが、実力をつける最良の方法だという考え方があると思う。丁度、数学の問題を解く時のようにゆっくり時間をかけて、あらゆる可能性を探って、正しい解にたどり書くという行き方である。筆者は、このような行き方も確かに実力をつける正統的な方法だと思う。しかし、問題はこのような行き方で、どれだけ学生が自由に読むことの段階まで進むことができているかである。この方式では、結局多くの学生を切り捨てることになっているように筆者には思える。これに対して、分からなければ最初に答えを示し、それがどうしてそのようになるのか、検討させ理解させる方式もあり、この方が初期の言葉の学習にいいのではないかと思う。数学の

場合では、問題の解答を見て解法のパターンを学ぶ行き方が考えられるが、翻訳を参照する方式はこれに当たるかと思う。分からない箇所原文とその翻訳された文を並べ、検討し先へ進む。同種の問題は、何度か出会ううちに、すぐに分かるようになるであろう。もっとも、数学とは違い、語学の場合は完全に分かることを必ずしも目指さず、6、7割の理解度で打ち切り、次に進んでも構わない。ここで必要なことは、外国語は完全に理解することは難しいと割り切って、いずれ分かることを期待し、先に進むことなのである。

言葉を覚えるには相当の時間がかかることは言うまでもない。真剣に取り組めば取り組むほど、そのことに時間が集中されることになる。すると当然他のことに費やされる時間は少なくなる。読書が好きな学生が、英語の原書を読みたいと思ったとする。この学生は、原書に向かうつど、自己の語学力のなさを痛感し、語学学習に励むであろう。こうして、読書そのものは先送りされ、多くの場合は、実際に読むことなく、遠い願望として残るだけのことになる。翻訳で済ましていけば、遙かにいろいろなことができたのに、真面目だったばかりに読むことができなかつたというアイロニーが生じてしまう。今非常に単純な計算をしてみたいと思う。仮に500時間の英語の学習をしたとして、そのうちの300時間を興味ある英語の本を読むことに回したら、どうであろう。1時間に5頁として、1,500頁は読むことができる。慣れてくれば、もっと多くを読むことも可能になるだろう。300頁の本とすれば、5冊は読むことができる計算になる。今まで、原書を読むことは、少数の才能ある者、あるいは努力家だけが、いわば特権的に享受していた楽しみであったものが、多くの学生が翻訳を利用することによって、原書を読む楽しさを味わうことができるのである。気軽に読むことができることこそ、語学力を伸ばす上で大切なことである。今までは、基礎を固め十分な態勢が整った時に、多読が可能との完全主義が、多くの学生を読書の喜びから遠ざけていたのではないだろうか。読書を読けていくうちに、次第に外国語の力がついていく、しかし、力そのものは、副次的なものとして考え、あくまでも外国語によって、開かれる世界を知ることが、大切なのだと考える。

筆者はこのような考え方を英語に限らずいろいろな外国語の学習の初期の段階から、適用していくことができるのではないかと思う。初めは、文法事項を後回しにして、また時には英文法の知識を応用しながら、語の一つ一つの意味をとりながら内容をつかんで行く。ともかくも、語彙を短期間に増すことを狙うのである。初めから原校と翻訳とを並べて読み進むには無理があるので、注釈その他でできるだけ、短期間に語彙力をつけ、その言語の持つ感じをつかめるような工夫が必要とされる。ギリシャ語聖書にあるように、単語の下に訳語が置かれているインターリア方式の本が、数多く出されることが望まれる。出来ればさらに格変化や時制も示されれば、能率的に学べるのではなかろうか。書かれている内容が興味の持てるものであれば、読み進んでいくことができるであろう。第2第3の

外国語でも、この方式によって様々な本を読むことができるのである。

万一実際に読む力がつかなかったとしたなら、この方式は効果がなかつただろうか。筆者は、その場合力がつかなかったかもしれないが、しかし読書は出来たのだ、そして外国語も楽しく学べたのだと言えるならば、それは十分評価に値すると思う。

## 結 論

語学教育においていかにすれば学生の語学力を向上させることができるかということは言うまでもなく重要な視点であるが、もう一つ大事な視点があるのではなからうか。それはその語学によって学生は何をすることができたのか、あるいは実際に何をすることができるようになったのかということである。このことは実際の教育の場で忘れられているような気がしてならない。どんなに語学力がついたとしても、ほとんど読むことがなく、また将来的にも読めないのであれば、何のための語学力かということになると思う。極端かもしれないが、語学力はそれほどつかなかったが、実際に原文は多く読んだという方を、外国語の力がついたが、何も読まなかったというよりも、意味あることと思う。

翻訳を利用してではあれ、一冊の本を読み切ることができたということは、大きな喜びになる。これによって、学生は2冊目、3冊目に取り組んでいくであろう。最終的には、翻訳を離れ、時折辞書を引く程度で、読書を楽しむことが可能になるであろう。

外国語教育に読書指導は含まれているわけでも要請されているわけでもないが、読書を通して外国語教育がより効果的にできるのであれば、積極的に読書を取り入れるべきであると思う。

(1989年9月7日受理)